

お題を出すったー

小高まあな

『メンヘラ』と『携帯電話』

『誰かの声が聞こえるのよ、助けて』

携帯電話から彼女の声。

『早く来て』

彼女は小説でいう所の精神に問題のある語り手、信頼出来ない語り手、どんでん返しのための語り手。メンヘラ気味の彼女にはよくあること。

だから僕はゆっくり彼女の家に向かった。

扉を開けたらそこには他殺体。

『女子高生』と『幽霊』

彼女をずっと見ていた。

太腿も露なミニスカートも、細くて長い脚の彼女には似合う。校則違反でも彼女には似合う。綺麗。

でも彼女みたいに私はなれない。

出来るなら、彼女の白い肌に触れてみたい。桜色の唇も、綺麗。

でも、私は彼女に触れない。

彼女は私の教室の片隅に座る、幽霊。

『記憶喪失の男』と『コーヒー』

もう夏も終わりだ。

「涼しいね」

言って彼女が隣に腰掛ける。

彼女は誰なのか、僕は誰なのか、ここは何処か。

「どうぞ」

渡されたコーヒー。丁度いい苦さ。この味を知っている。

「思い出した？」

彼女が言った。頷いた。

「ねえ何なの？」

「記憶喪失ごっこ。君のコーヒーは最高ってこと」

『自分』と『携帯電話』

浦和駅西口改札ですぐの喫茶店。そこが私のバイト先。

閉店後、テーブルの上に赤い携帯電話。お客様の忘物。貴重品は交番に届ける事になっている。持って行かないと、すぐそこだし。

ひっくり返す。裏にプリクラ。そこには幸せそうな男女。一人は元カレ。

その顔にぐっと爪を立てた。

『同人作家』と『宇宙人』

「地球侵略に来ました」

目の前のつるつとした小柄な物体が言った。

「知るか。日本には蛙で軍曹の宇宙人が居るんだ。手伝え！」

言って原稿を押し付ける。期限間際なんだ、こっちは。

「完成した……」

「……これで地球侵略出来ますかね？」

変装した彼とコミケに向かった。

『箱入り娘』と『手錠』

彼女は箱入り娘。

大学生になった今も門限は8時。アルバイトもサークルも禁止されている。大事に大事に育てられている。

「愛されてるなー」

と冗談まじりで言ったら、彼女は殆ど陽に当たった事のないような、その白い肌を涙で濡らし
呟いた。

「親と手錠で繋がれているようなものよ」

『老女』と『守護霊』

よう、ばあさん、俺様は死神だぜ。迎えに来たぜ。

は？ 守護霊じゃねーよ、死神だよ。勝手に拝むなよ、死神だつてば。今までありがとうございましたじゃないって。

あー、もー、いいよ守護霊で。

お願いがある？ なんだよ。死んだじいさんに会いたい？

うん、分かった。連れてってあげる。

『医者』と『コーヒー』

コーヒーの飲み過ぎは体に良くないですよ、と男が言った。はあ、と適当に相槌をうつ。白衣を着た男はコーヒーについて話続ける。

「そもそも貴方はなんですか？」

「医者ですけど」

「死後の世界なのに？」

「生まれ変わるためには健康な魂じゃないと」

とふんぞりかえって医者が言った。

『構ってちゃん』と『羊』

「私メリーさん、今貴方の家にいるの」

「私メリーさん、今貴方の隣にいるの」

そして羊のぬいぐるみが頬に押し付けられる。

「私メリーさん」

「メリーさん羊じゃなくね？」

小さく呟く。無視された。

「今貴方にしてほしいことがあるの」

彼女が微笑む。

私メリーさん、今貴方との距離は0。